浦井先生

すぐに返事を差し上げるつもりでしたが、いざメディア授業が本格的に始まると、思いのほか忙しく……

目下、非対面型としては C-learning とBlackboard、対面型としては ZoomとTeams という４種類のメディアを用いて授業を行なっており、それらに習熟するのがなかなか大変です。とりわけマイクロソフト社の Teams がやたら重く、ソフトバンクに言ってローターを新製品に取り換えたほか、やむなく自分もDellのノート型パソコンを最新型に買い替える羽目に。おかげで通信環境に何ら問題はなくなりましたが、それやこれやで２０万ほどの出費で、大赤字であります。

ネット型授業だと楽なように勘違いしておりましたが、学生からの問い合わせや質問などが引きも切らず。課題をやって写真に撮ったものをメールで送らせるのですが、いちいちチェックしてコメントを返すのに、やたら時間を取られます。これまでは「やっときなさい」で済んだのに……

＊

浦井先生のコメントを読み、しごく解りやすくなった部分と、自分なりの観点からこれは申し上げておいた方がよさそうだという部分があります。じつはこの後者にかんしては、かねてより「めくら蛇に怖じず」で申し上げてきたことであり、いくら先生から懇切に説明されてもいっこうに納得していない論点であります。それをもう一度取り上げておきます。

それは、まさに以下の問題にかかわります。

＞今日の経済学が関与しているのは「価値情報」という意味での「貨幣的な情報縮減性」であって、貨幣ではありません。ただし、その「貨幣的な情報」というのは、今日の経済学理論における最も重要な「リアリティ」であると私は位置づけております。それを放棄するなら、経済学は経済学でなくなる、と言っても過言では無いと考えております。経済学の本質は、あくまでも価格理論（価格＝価値情報＝貨幣的な情報）であるというのが、私の見解です。

＞問題は、この価格理論（貨幣的な情報の理論）が、実際に「貨幣」と関わる、その関わり方です。今日の経済学理論はその理論の中に「貨幣」を持っていないのですが、それでも現実の世界には「貨幣」があるわけで（……）とんでもない状況（理論がまともに実践に活かされない）である（……）

以上の浦井先生のお話を、私は以下のように要約したいと思います。

今日の経済学が関与しているのはあくまで価値情報である。これは別の言い方をすると貨幣を介した情報の縮減性であって、貨幣そのものではない。この意味での価値情報、ようは価格理論こそが経済学の本質であり、そのリアリティである。ところが、価値情報と貨幣は異なる。もし両者が厳密に一致するなら、経済学者は経済の動向を完ぺきに予想でき、ことによると市場で大儲けできるかもしれない。しかるに両者は蓋然的には相関する（ように見える）ものの、コヒーレントに一致することはない。

ここで私の考えを端的に言わせてもらうなら、貨幣とは外部性なのだと思います。外部性の象徴こそ私たちが「貨幣」と呼ぶものではないか。で、この意味での貨幣に現代経済学が関与し得ないのは当然のことのように思える。

これはたとえば詩人に「言葉とは何ぞや？」と問うに似ている。そんなことを考えて詩作する者など誰もいない。言葉は使うもの、使用するものであり、それにより一定の効果を上げることができればそれでいいわけです。かつて詩人はポリスの民に仕えた。あるいは王に仕えた。共同体の要請を言葉にするものが詩人だった。

近代以降、詩人は仕える相手を失う。近代の大衆は詩を必要としない。かくしてマラルメのいう「芸術のための芸術」の時代になる。むろん少しでも売れた方がいいでしょうし、そこに文学的流派が生まれることもある。一国における一時代の文学的な価値観が形成されることすらあるでしょう。その一方、あくまで自分が信じる美や価値観に殉じるのを選ぶ「呪われた」詩人も出てくる。

貨幣にしても使用するのが何より肝要です。使わず溜め込む吝嗇漢は、上記の「呪われた詩人」のような存在と言えましょう。破滅を運命づけられています。おそらく内部留保に血道を上げる日本企業もまた……

さて、使用するかぎりはそこに価値が関わる。交換され、価格の体系が形成されねばならない。むしろこの価値情報の体系性が担保されることが肝要で、そこで「貨幣とはなにか」と問うことなどバカげている。貨幣とはたんに交換の手段にすぎないからです。商品の価格ないし価値は、つねに後づけで決まる。

そんな「使用」に還元されぬ価値をもたらすもの、それを私は「外部性」と呼びたい。これを詩と経済を対比させて論じてみましょう。

ありふれた詩人、あるいは現代の作詞家たちにとって言葉の存在は自明です。それを自明と考える者には決して見えない外部性、それが言葉の記号性ないし超越性です。それは権力と歴史に刺し貫かれている。

同様に、私たち現代の消費者にとって経済の存在は自明です。私たちにとって貨幣は交換の手段でしかない。コンビニでものを買うとき、ほとんど意識すらしない。そんな一般の経済人には決して見えない外部性、それが貨幣の象徴性そして超越性ではなかろうか。

それはたんなる情報の縮減性ではない。情報が差異の体系であるとするなら、それを超えたもの、それ以前のもの、それを攪乱するものを貨幣はもたらす。それは濁りであり、雑音であり、乱調である。ざらざらして、体系に吸収不可能なものである。

たとえ目下の貨幣の役割が暗号貨幣へと移譲されるに至っても、それが記号として書き込まれ、ひとの目に晒されるものであるかぎりで――ことによると今の貨幣以上に、それはシステムの攪乱要素になる可能性があります。貨幣が記号に近づけば近づくほど逆に、その不安定性が高まるという逆説的な可能性はないだろうか。

一言でいえば、安定した体系性に還元不可能なもの――その意味で私は「外部性」という言葉を使いたいと思うのです。

言葉にすぎぬものが言葉を超えた映像と情動と運動をもたらす、記号にすぎぬものが記号を超えたヴィジョンを垣間見せる。むしろそれこそが言葉の本質であり、私たちが言葉に秘かに期待するものではなかろうか。

私たちは言葉の意味がその内にあると信じてしまう。しかるに、それは言葉の外にある。

私たちは貨幣の価値がその内にあると信じてしまう。しかるに、それは貨幣の外にある。

むろん形式的には内と外を整合的につなげば、言葉は了解可能なものになり、貨幣はコントロール可能なものになるでしょう。しかるに、それを許さないような《外》、私たちの想定を超えたもの、そもそも想定不可能なものを私は外部性と呼ぶのです。この意味での超越性は、べつだん神秘的なものではない。言葉の外に神はおらず、経済の外に神の手など働いていない。

外なる神を夢見ることは、競馬必勝法を求めるようなものです。これは断言できることですが、少なくとも中山競馬場に神などおりません。馬券が当たらないのは神が居るからでも居ないからでもない。悪魔が居るからでも居ないからでもない。端的に、当たらないのである！なのに、誰かは必ず当たっている。１人も当たらないレースなどめったにない。時に、すべては偶然の戯れだと言いたくもなるわけです。しかるにそうではない。これが今回、私が強調したい論点です。

貨幣はなぜ濁ってしまうのか。透明ではあり得ないのか。それは自らの外部とつながることで、その生命を得ているからです。貨幣は市場と結びついている。市場は生活と結びついている。そして生活とは、本来的に不安定なもの、見通しの効かぬものである。そこから貨幣はやってくる。

マラルメは晩年、「いかなる骰子の目も偶然を廃位することはないだろう」（Un coup de dés jamais n'abolira le hasard）という長い題名の詩を書きます。この詩の題名については色んな解釈がありますが、じつのところ至極単純な話だろうと私は思います。

と申しますのも、１つの骰子には６つの面しかなく、それを２つ組み合わせたところで、出目には限りがあります。出目は蓋然的です。それは必ずしも偶然ではない。マラルメが言わんとするのは、そんな蓋然的な真実についてではない。世には予測不可能な偶然というものがある。それがいわば王座につき、世界を支配する。

一発の銃弾により世界戦争が始まる。偉大なる王が病気で突然死する。単勝１倍台の馬が出遅れる……

そうした偶然の王位を蓋然性が廃し、その座を奪うことなど決してないだろうと詩人は言うのです。いくら蓋然性の計算をやり尽くしても、偶然性の到来を避けることはできないだろう。その王座を揺るがすことはできないだろう、と。

そして、そんな偶然性こそがマラルメにとっては美の実在性の根拠とも見なすべきものでした。外なるものが今この時に奇蹟のように立ち顕われる。実在するに至る。それが美の契機、美の実在の刻（とき）です。バタイユが「好運」と呼んだ一刻です。

マラルメの詩では蓋然性にすぎぬものと偶然性が対比され、偶然性の優位が宣言されている。この場合の偶然性は、あくまで蓋然性との対比で見出されるものであり、すべては偶然だとか、すべては遊びだとか決めつける、そんな粗雑な眼差しが把捉できるものではありません。あらゆる蓋然的な可能性を尽くしたところにしか、偶然の王座は姿を顕わさない。しかも、その後の詩の展開を読むに、それは一瞬姿を顕わしても忽ち消え去るような何かなのです。語り手である難破船の船長の死とともに、一切の魂のドラマは底知れぬ海の晦冥に姿を消します。

マラルメは詩の言葉の本質を問うて、その記号性の生起と消滅をいわば蓋然性と偶然性の戯れとして１篇の詩に結晶化してみせたわけです。

さてそこで、身の程もわきまえず、私が主張したいのはこういうことです。貨幣の本質は蓋然性にあるのではない。価値や価格といった予測可能な差異の体系性の内にあるのではない。むしろその外に、本来はいかなる意味でも予測不可能な偶然性からその生命を貨幣は得ている。私たちは価格が一定の蓋然性の計算のもとに決まるように錯覚している。多くの人がその錯誤を共有しているかぎり、たしかに価格は一定の枠内で決まる。が、それはそもそも幻想のごときものである。そんな幻想を担保するのが貨幣の役割であり、貨幣とは経済幻想の象徴である。共有された幻想が崩れれば、価格や価値など一瞬にして崩壊する。経済理論も、経済学も跡形もなく消滅する。実際のところ、そんな場面に私たちは歴史上何度も立ち会ってきたはずである。

ちなみに、マラルメの時代に本の消滅という事件が（何度か）ありました。１９世紀末のフランスで、売らんかなの商魂から版元が本をたくさん出しすぎた。折も折、大衆の娯楽の対象が自転車やハイキングに移り、誰も本を読まなくなった。途方もない暴落が起き、出版機構が一時的に停止したのです。マラルメはそれを見た。書物とはいずれ消滅するメディアだという確信を持つに至った。むしろだからこそ、『骰子の一擲』という最後の書物を推敲することに精魂を傾け、その途次で頓死するのです。

今だってまだ本はあるじゃないか、本の時代は終わってないじゃないかと強弁する人たちが大勢いる。しかるに、そんな人たちはいまだ書物の死を体験していない。書物もまた死ぬものだと自覚していない。だからこそ「来たるべき書物」（ブランショ）に想いを馳せることができないのです。

無理やりこの「書物の死」を経済学の理論に結びつけてみましょう。経済学もまた死ぬのです。というか、実際にはもう何度も死んでいるのです。なのに自分たちが死んだこと、死すべき存在たることにいまだ気づいていない。理論の内に死が折り込まれているのに、それを見ないで済ませている。思えばマルクスの経済学批判とは、じつはこの点に懸かっていたのではないか。

マラルメは詩が外から来るものであることを弁えていた。むしろ外から来るものを受け止める器として自らの最後の書物を準備した、と言えるでしょう。

来たるべき経済学者もまた、あたかも詩人のように、体系を死に至らしめる致命的なもの、すなわち貨幣を自らの体系の内に容れるべきではなかろうか。というか、正確に言うなら、経済学という体系が生きているように見えるのは、我知らず秘かに貨幣によって生かされている、あるいは生き延びさせられているからではあるまいか。

体系は自らに死をもたらすものによって逆に生かされているのではないでしょうか。いわばゾンビのごとく。そしてゾンビとしての生を肯定することこそが、じつは真に生きることなのではないかと私は疑う者であります。